

## 現行民法典を創った人びと（7）主査委員 4：横田 国臣・高木豊三，外伝3：明治20年ファンシーボール と現行民法典の起草者たち

七戸，克彦  
九州大学大学院法学研究院教授

<https://hdl.handle.net/2324/15934>

---

出版情報：法学セミナー．54（11），pp.67-69，2009-11-01．NIPPON HYORONSHA  
バージョン：  
権利関係：



主査委員④——横田国臣・高木豊三

九州大学教授 七戸克彦

横田国臣 (1850-1923)

1 横田国臣は、嘉永3年8月9日、島原藩士・横田宗雄の長男として豊前国宇佐郡辻村（島原藩の飛び地）に生まれ、後に横田四郎の養子となる。元治2年（1865年）日田の咸宜園（広瀬淡窓塾）に入塾、このとき同期だった清浦奎吾



明治19年ドイツ留学中撮影(36歳)<sup>1)</sup>

の斡旋で、明治6年埼玉県の師範学校教諭となる。その後、明治9年司法省に出仕してからは、13年検事、15年司法権少書記官、17年司法少書記官と累進し、明治19年総勢15名の司法官グループの一員として渡独、一人だけ官費での留学延長が認められ、5年に及ぶ留学の後、明治24年5月帰国<sup>2)</sup>。

2 翌明治25年1月には司法省内に設置された刑法改正審査委員、翌2月審査委員長、その後8月に司法次官となった清浦奎吾に抜擢されて11月に初代の民刑局長に就任。だが、公務多忙のためか、前年度より講師を務めていた帝国大学法科大学での刑法講義は休講が多く、教授会では富井政章教授担当すべしとの発議がなされた。例によって富井は「羸弱〔=虚弱なこと〕ノ身体ニテ」と逃げようとするが、結局代案を考えなければならない羽目になり、刑事訴訟法の担当講師であった井上正一に頼んで、横田の講義の半分を受け持ってもらうことにした。翌年度から横田は講師を切られている<sup>3)</sup>。

法典論争において断行派に立った横田は、法典調査会では、ドイツ通として一般委員では最多の発言回数を誇る<sup>4)</sup>。その一方で、横田は、民刑局長として、上記刑法改正審査委員のほか、民事訴訟法調査委員会・刑事訴訟法調査委員会も取り仕切った<sup>5)</sup>。

3 第2次松方正義内閣で法相となった清浦の下で明治29年10月司法次官に昇った横田は、第3次伊藤博文内閣末期の明治31年6月28日、明治19年留学組の高木豊三（横田の後任の民刑局長）・加太邦憲（東京地方裁判所長）と組んで老朽司法官の淘汰を断行。伊藤内閣総辞職後、隈板内閣成立の間隙に強行されたこの処分の実の狙いは、非学士派司法官の領袖・北島治房や春木義彰を排除して大隈派による司法官猟官人事を予防するためともいわれるが、そのあおりで、無学歴派の中村元嘉（大審院部長）らも休職

を命じられてしまう。一方、横田は春木の後釜の検事総長に座り、高木は横田の後任の司法次官に昇り、加太は北島の後を襲って大阪控訴院長に栄進したが、これに憤った北島らは、大隈首相と大東義徹法相を動かして、大東は横田に検事総長辞職を迫るも、横田は

拒絶。しかし、ここで横田は痛恨のミスを犯した。閣僚宛の書簡で、大東の辞職勧告行為を「賤劣なる所行」と記してしまったのである。大隈は、すかさずこれを捉えて上官侮辱の懲戒理由とし、10月15日横田の懲戒免官を発令した<sup>6)</sup>。

4 だが、隈板内閣が短命に終わり、第2次山県有朋内閣で再び法相となった清浦により、明治32年3月特旨にて懲戒処分を免ぜられ復職。その後、明治37年には検事総長に返り咲き、明治39年には大審院長まで昇りつめた。以後14年11箇月に及ぶ在職期間は歴代1位（2位は横田の前任・南部襄男の9年9箇月。なお、戦後も入ると最高裁判所第2代長官・田中耕太郎の10年10箇月が2位になる）。

しかし、大正10年、原敬内閣は、裁判所構成法を改正して判事に定年制を導入、72歳の横田は引退を余儀なくされた。「横田退法」と呼ばれるこの法改正により、河村讓三郎・水上長次郎・末弘巖石らも定年退職となったが、河村・水上が貴族院議員に勅撰されたのを知り、「アンなヤクザものまで推薦して置きながら、我輩を無視するとは何事だ」と怒鳴り散らす横田の姿は<sup>7)</sup>、かつて彼自身が若かりし頃に淘汰した老朽司法官そのものであった。

- 1) 『写真出典』法律新聞393号（1906年）1頁。
- 2) 鈴木正裕『近代民事訴訟法史・日本2』（有斐閣、2006年）1頁以下、67頁以下。
- 3) 『東京大学百年史（部局史・一）』（東京大学出版会、1986年）62頁、67頁。鈴木・前掲注2）181頁。
- 4) 七戸・本連載「(1)」本誌653号（2009年）42頁。
- 5) 鈴木・前掲注2）131頁。
- 6) 楠精一郎①『明治立憲制と司法官』（慶應通信1989年）165頁以下、同②『列伝・日本近代史』（朝日選書、2000年）119頁、鈴木・前掲注2）200頁以下。
- 7) 原嘉道『弁護士生活の回顧』（法律新報社、1935年）119頁。

## 高木豊三(1852-1918)

1 <sup>たかぎとよぞう</sup>高木豊三は、嘉永5年5月17日、旧幕臣(代官)高木文右衛門の四男として丹波国桑名郡神吉村に生まれた。戊申戦争時(15歳)には、山陰道鎮撫使・西園寺公望に従って巡歴。その後、京都府立仏語学校で富井政章・薩埵正邦らとともにレオン・デュリーに学び、明治8年4月東京開成学校に移るデュリーに従って、富井らとともに上京。その中の4人が、同年9月の司法省法学校正則科第1期生の補欠試験(留学<sup>9)</sup>で抜けた欠員募集)を受験し、富井は落第したが高木は合格。このとき同じく補欠入学した一瀬勇三郎によれば、高木は「能く遊び能く働くと言ふ豪傑肌の方だ」<sup>10)</sup>。

翌明治9年7月末に正則科1期生に対する教育は終了し、7月中に司法省出仕が決まっていた加太邦憲を除く19名につき、8月5日進路が決定された。



撮影年月日不詳<sup>8)</sup>

の法典調査会メンバー5人の名が登場するこの事件は、結局被告人免訴により決着、高木の大審院判事の首は繋がった。

3 その後、高木は、法典調査会時代の明治29年10月横田の後任の司法省民刑局長に就任、明治31年6月28日、明治19年留学組の横田

・加太と結んで老朽司法官の淘汰を断行、検事総長の座を得た横田に代わって司法次官に昇ったが、老朽司法官や大隈派との抗争を察知し、わずか1週間後の7月5日に辞職して弁護士に転じた。これに対し、横田は、高木の説得により(?)抵抗を決意し、結局懲戒免職となってしまった。

隈板内閣が倒れた後、第2次山県有朋内閣の法相となった清浦奎吾は、横田の復権とともに、高木に対しても司法次官への再就任を要請したが、高木は固辞。先の抗争で嫌気がさしたのかもしれない。

4 高木の著書『民事訴訟法論綱』は、「当時法理書の一頁を<sup>ひもと</sup>繙く者にして之を手にはせざる無く、君の民事訴訟法論綱を繙かざるは法律を学ぶ者の恥辱とする処なりき」とまで絶賛された<sup>11)</sup>。だが、斬馬劍禪(五来欣造)は、民事訴訟法に関して「独り天狗たり得べき」高木が、「其の論争を聞はずに及んで梅〔謙次郎〕博士の同法に<sup>まよ</sup>委しきは、遙に其の上に在らんとは」と評している<sup>12)</sup>。なお、韓国で没した梅への男爵追贈を井上馨から打診された高木は、「人爵に恋恋たるやうな男でもなかったですが、遺族の困らぬ丈、金でもドッサリつきますか」などと返答したため、この物言いに癩癩を起こした井上は、手続を撤回してしまった<sup>13)</sup>。してみれば、穂積陳重・富井政章が有爵者(男爵)であるのに対して、梅が爵位をもたないのは、高木のせいということになる。

	明治5年入学組	明治7年編入組	明治8年編入組
フランス留学	宮城浩蔵 小倉久 岸本辰雄		
司法省出仕	加太邦憲	木下哲三郎 内藤直亮 井上操	大島三四郎 岩野新平 龜山貞義 橋本胖三郎 一瀬勇三郎 井田鐘次郎 高木豊三
不採用		矢代操	杉村虎一 藤林忠良 立木頼三 福原直道 大塚成吉

結局、1期生で留学できたのは明治5年の当初入学組だけであったが、その後、加太・高木・一瀬は、明治19年の司法省によるドイツ留学メンバー15名に加えられる。ただし、このうち官費留学は、明治17年卒業の正則科2期生5名(河村讓三郎・小宮三保松・田部芳・富谷銈太郎・前田孝階)と東京大学法学部卒業生1名(石渡敏一)の計6名で、高木ら1期生3名のほか横田国臣・近藤鎮三・応当(藤堂)融の計6名は、私費留学であった。

2 明治23年5月一瀬と同船で帰国した高木は、10月福島地方裁判所長から、翌24年7月大審院判事に栄転するが、翌25年弄花事件の懲戒訴追を受ける。被告人中には高木のほか岸本辰雄、弁護人中には鳩山和夫・岡村輝彦、裁判官中には本尾敬三郎と、後

8) 〔写真出典〕白鳥令(監修)『激動の日本政治史・明治・大正・昭和歴代国会議員史録(上巻)』(ロッキ一、1979年)979頁。

9) この時の留学者は、井上正一・磯部四郎・岡村誠一・木下広次・熊野敏三・栗塚省吾・関口豊の7名。

10) 法律新聞246号(明治37年11月30日)21頁。

11) 『日本法曹界人物事典(第8巻・弁護士編・弁護士時代Ⅱ)』(ゆまに書房、1996年)183頁、419頁。

12) 斬馬劍禪『東西両京の大学』(講談社学術文庫、1988年)60頁、東川徳治『博士梅謙次郎』(法政大学・有斐閣、1917年)178頁。

13) 東川・前掲注12)285頁。

## 外伝③——明治20年ファンシーボールと現行民法典の起草者たち

1 第1次伊藤博文内閣・井上馨外相の欧化政策時代の明治20年4月20日、伊藤首相官邸で催された仮装舞踏会といえ、真っ先に思い浮かぶのは次の事件であろう。被害者とされる戸田氏共伯爵夫人極子(岩倉具視の二女)が、後年孫の元子に語ったところによれば、「好色の名の高かった伊藤博



ファンシーボールでの  
矢田部良吉(左)と穂積陳重(右)<sup>14)</sup>

文は、30歳という女盛りの美しい祖母に眼をつけて、仮装舞踏会が催されたある晩、祖母を一室に誘い、狼藉に及ぼうとしたのでした。祖母は驚いて開いていた窓から飛び降り、はだしのまま庭を駆け抜けて、辻待ちの人力車で逃げ帰ったそうです<sup>15)</sup>。だが、第一に、当初の新聞報道によれば、事件発生は4月25日か26日であって、ファンシーボールの催された20日ではない。第二に、三島通庸警視総監宛の密偵報告書・犬養毅からの事情聴取には「其事ハ強姦ニ非スシテ戸田氏共氏ノ夫人ト兼テ密通シタリ」とある。となれば、新聞は、以前からの不倫関係を強姦未遂事件に改竄したことになる。第三に、ファンシーボールの翌21日には、薩派の長・黒田清隆内閣顧問が外遊から帰国したが、明け方までの騒ぎで疲れ切った閣僚らは出迎えに行かなかった。拗ねた黒田は、26日井上外相邸にて開催の天覧劇の勧誘を「忙しいから行けないといふたら行けないわ」と一喝したが、新聞は、これを欧化政策断乎反対の態度表明に脚色し、スキャンダルにまみれた伊藤に代わって黒田が首相となる気運を盛り上げた。結局、この事件は、三島ら薩派が、伊藤・井上ら長州閥を追い落とすため仕組んだ情報戦だったらしい<sup>16)</sup>。そして、この謀略は首尾よく運び、翌明治21年4月30日黒田は第2代首相の座に就く。

2 一方、井上外相の欧化政策と条約改正交渉も、ファンシーボールを機に一気に崩壊する。勝海舟は、伊藤宛の意見書「二十一箇条の時弊」において、「舞踏会盛んに被行、附いては淫風の媒介となる如き風評も下にては紛々窃に可伝候」と苦言を呈する<sup>17)</sup>。伊藤幕下の井上毅もファンシーボールには批判的で、5月10日朝「条約改正ニ関スル井上毅・ボアソナード氏対話筆記」には、次のような会話がある<sup>18)</sup>。「ボ氏突然トシテ予〔＝井上〕ニ問テ云、足下ハ伊藤伯ノ『ブアンシ、ボール』に赴キシ乎……予云、

偶々病氣ノ故ニ辞シタリ……ボ氏云、足下ハ定テ予ト同感ナル故ニ、態ト辞セラレシナルヘシ。予ハ近日宴会ノ席ニ赴クコトヲ好マス。井上ノ不參を仮病と喝破しての発言であり、その後、ボワソナードは、6月1日付で条約改正反対の意見書を山田顕義法相に提出。さらに、意見書入手した自由党・星亨一派は、秘密出版のうえ政府攻撃の材料としてばらまいた<sup>19)</sup>。

3 それにしても、ファンシーボールの出席者の衣装は、伊藤博文のヴェニスに貴族に対して、井上馨は三河万歳、山田顕義は吉備真備、末松謙澄は曾我五郎時致、渋沢栄一は弁慶、戸田伯爵夫妻は太田道灌に山吹を手向ける賤の女と、今の高校の学園祭のほうがまだましで、奇兵隊軍監の装束で登場した山県有朋に至っては、仮装でも何でも無い、昔の自分そのものである。帝国大学の教授陣も出席しており、渡辺洪基総長は西行法師に扮するなど、昔の帝大教授の処世術も、それなりに大変であったかと同情する。その中であって、大黒様に扮した矢田部良吉(初代植物学教授)と並んで、恵比寿様の格好で写真に収まっているのが、穂積陳重である(二人とも妙に楽しそうである)。「鹿鳴館の華」と謳われた戸田伯爵夫人の写真ももちろん美しいのであるが、しかし、本誌は学生向けの学習雑誌であるから、教育的配慮に基づき、穂積の写真を掲載しておく。

14) 「写真出典」アサヒグラフ臨時増刊『写真百年祭記念号』(朝日新聞社、1925年)97頁。ちなみに、九大蔵本は、なぜか舟橋諄一の寄贈書である。

15) 徳川元子『遠いうた——徳川伯爵夫人の75年』(文春文庫、2005年)124～125頁。

16) 「ファンシーボール事件」の詳細については、前田愛『幻影の明治』(岩波現代文庫、2006年)125頁以下。

17) 石井孝『勝海舟』(吉川弘文館、1986年)233頁。

18) 国学院大学日本文化研究所(編)『近代日本法制資料集(第9)』(東京大学出版会、1987年)152頁。

19) 詳細は、堅田剛「明治20年のファンシーボール——あるいは鹿鳴館外交の挫折について」独協法学66号(2005年)1頁……〔所収〕『明治文化研究会と明治憲法』(御茶の水書房、2008年)33頁。

(しちのへ・かつひこ)